

令和 5 年 2 月 24 日

教 育 長 様

研究コース	
グループ研究 A	
校園コード(代表者校園の市費コード)	
661456	
選定番号	121

代表者	校園名:	大阪市立今里小学校
	校園長名:	松永 かおり
	電話:	06-6981-8800
	事務職員名:	粟田 有加
申請者	校園名:	大阪市立今里小学校
	職名・名前:	主務教諭 藤井 優美子
	電話:	06-6981-8800

令和4年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和4年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	グループ研究 A	研究年数	新規研究(1年目)
2	研究テーマ		子どもの可能性を引き出す「個別最適な学び」「協働的な学び」の追究 ～教育DXの推進と1人1台端末を生かしたカリキュラムデザイン～		
3	研究目的		<p>本校は昨年度、教育工学会(JAET)の先進校に選定された。そこで、大阪市教育振興基本計画の最重要目標にも掲げられているように、多様な児童の可能性を引き出し、ゴール設定型学習と「個別最適な学び」を「協働的な学び」につなげることで教育DXの実現を目指す。ICTを効果的に活用したこれまでの実践をもとに、学習の基盤となる資質能力を育成し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行い、1人1台端末を生かしたカリキュラムデザインを生み出す。</p> <p>○児童の情報活用能力の実態把握のために活用してきた「情報活用能力チェックリスト」をオンライン学習、1人1台端末活用の場面や方法に即したものに改善する。</p> <p>○これまでに取り組んだ実践に、1人1台端末を生かした実践を最適に組み合わせることにより、年間を通して教科横断的に情報活用力を育成するためのカリキュラムマネジメントとその一般化を図る。</p> <p>○「個別最適な学び」「協働的な学び」の追究をめざした授業展開により、情報活用能力とそれを支える言語能力、問題発見・解決能力を高める。</p>		
4	取り組んだ研究内容		<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。(MSゴシック 9.5pt イント)</p> <p>○児童の情報活用能力の育成、情報活用指導力の向上、教育DXの実現を目的に、全教職員がICTを効果的に活用した授業改善を行い、研究授業を行った。研究授業を行う際には、園田学園女子大学 堀田博史教授を招聘し、指導講評ならびに研究を進めるにあたっての助言をいただいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 7月 授業研究会(3年体育科: 追いかけ再生アプリ、NHK for schoolを活用した授業) ・ 9月 授業研究会(5年家庭科: SKYMENUcloudボジショニングを活用した授業) ・ 10月 授業研究会(2年生活科: <チーム今里小>の遠隔交流・合同授業) ・ 10月 授業発表会(5年国語科: 東中本小との遠隔交流・合同授業) ・ 11月 授業研究会(4年国語科: 協働学習アプリを活用した授業) ・ 11月 授業研究会(5年算数科: スクラッチを活用した授業) ・ 11月 授業研究会(6年: 遠隔授業に向けて協働学習アプリを活用した授業) ・ 11月 研究発表会(6年国語科: 思考ツール、ARを活用した授業・オンライン、遠隔授業「がんばる先生支援」グループB224) ・ 12月 授業研究会(2年国語科: 協働学習アプリを活用した授業) ・ 1月 授業研究会(3年理科: 協働学習アプリを活用した授業) ・ 1月 研究発表会(1年生活科: SKYMENUcloud発表ノートを活用した授業・オンライン開催) <p>○学級休業や長期欠席児童には端末持ち帰りによる双方向通信授業、ハイブリット型授業実施</p> <p>○情報活用能力チェックリスト2022年版作成。</p> <p>○情報活用能力チェックリストによる児童の実態把握(毎学期)と課題解決のための各学年での指導実践</p> <p>○指導案(情報活用単元デザインシート)に、新たに「教育DXのポイント」の項目追加</p> <p>○ICT活用授業年間計画の作成と活用</p> <p>○個別最適化学習アプリ(デジタルドリル)の活用</p> <p>○遠隔授業で<チーム今里小>交流、隣接校との交流、大学・企業・専門機関との交流等を実践</p>		

		研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。				
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	日程	令和5年2月1日	参加者数	約20名	
		場所	大阪市立今里小学校			
		備考	オンラインで実施			
		大阪市教育振興基本計画に示されている、 <u>子どもたちが力強く生き抜く力を育むための教員の資質や指導力の向上</u> について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。				
		【見込まれる成果1】 個別最適な学びの成果を「共同的な学び」に生かし、その成果を「個別最適な学び」に還元するサイクルを確立することで、児童の情報活用能力とそれを支える言語能力、問題発見・解決能力の向上				
		《検証方法》 学力経年調査の国語科の記述式の回答結果において、「自分の考えを書く」出題分野の正答率を60%以上にする。また、学力経年調査や年度末の校内アンケートにおいて、「学級の友だちと話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができますか。」に対して肯定的に回答する児童の割合を90%以上にする。				
		〔検証結果と考察〕 ○「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、その成果を「個別最適な学び」に還元するサイクルを確立することを意識した授業を年間を通して実施することができた。 ○校内アンケート「学級の友だちと話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができている。」「ほかの学校と遠隔交流で楽しく学習を深めている。」の肯定的な回答の割合は、どちらも91.8%と90%を上回った。 ○児童への遠隔交流授業後のアンケートの記述欄では、「自分たちの地域とくらべて、自分たちの地域の良さを見つけられた。」「聞き取りやすいように話した。」など、他校の児童との話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができたと実感していた。				
		【見込まれる成果2】 児童が主体的にICTを活用し、協働的な学びや言語活動を行うことによる児童の情報活用能力の向上				
6	成果・課題	《検証方法》 児童に対し情報活用能力チェックリストを年度当初、および年度末に実施し、全学年とも平均を10ポイント向上させる。				
		〔検証結果と考察〕 ○これまでに活用していた「情報活用能力チェックリスト」を改善したことによりオンライン学習、1人1台端末活用の場面に即した力をつけることができた。 ○情報活用能力チェックリスト2022版を活用することにより課題が明確になり、スキルアップへつながる学習を確実に行い、課題である項目を着実にスキルアップすることができた。 ○児童に対し情報活用能力チェックリストを各学期に実施し、児童の情報活用能力の肯定的な回答の推移をみたところ、年度末の調査結果では年度当初に比べ、すべての項目において10ポイント以上向上してきた。特に操作スキル、情報モラルに関しては、どの学年もよく身につくことができた。 ○「情報活用」の「うまくいかないときに改善するための問題点・解決方法を見つける」項目において、肯定的な回答が低い学年が多く、「問題発見・解決能力」においての課題が残った。問題解決と言語活動を組み入れた学習単元の工夫を重ねる必要がある。				
		【見込まれる成果3】 教職員のICT活用スキルや授業力の向上				
		《検証方法》 教職員のICT活用指導力アンケート（文科省「学校情報化調査」）において、すべての項目における平均値が3.5以上となるようとする。				
		〔検証結果と考察〕 ○校内で実施した「教職員のICT活用指導力チェックリスト」の結果は、肯定的な回答の総合平均が97%と大変高い結果となっている。「ワープロソフトや表計算ソフトを活用した児童への指導」に関しての項目で数値が低かったのは、担当学年によるものと考えられる。報告書提出の時点では教職員のICT活用指導力アンケートは未実施であるが、3.5以上となる見込みである。				

6 成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <p>○ICTを活用したこれまでの実践を整理し、学習の基盤となる資質能力を育成し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と、1人1台端末を生かしたカリキュラムデザインの一般化。</p> <p>《検証方法》</p> <p>1人1台端末活用の年間計画・単元計画を作成し、HPに公開し一般化を図る。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>○人事異動や担当学年の異動があっても、これまでのICTを活用した授業を「ICT年間計画」に整理したことにより、系統的にICT活用の指導ができるカリキュラムや研修体制で進めることができた。</p> <p>【見込まれる成果5】</p> <p>《検証方法》</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>【研究全体を通した成果と課題】 具体的に記載してください。</p> <p>〈成果〉</p> <p>○「情報活用能力チェックリスト2022年版」を活用することにより、一人一台端末を活用する場面にあった情報活用能力を身に着けることができた。</p> <p>○日常的に1人1台端末を活用し、情報活用能力チェックリストで見えた課題をクリアできるような内容を組み込んだ単元構成を工夫することで、低学年から系統的に情報活用スキルを身につけさせることができた。中でも「操作スキル」についての肯定的な回答を90%前後まで引き上げることができ、チェック項目に追加したオンライン学習に必要なスキルも身に付けることができた。</p> <p>○教育DXの推進においては地理的制約に関わらず、遠方の小学校と年間計画を元に打ち合わせをすることで、相手校との打ち合わせが効率よく進められ、交流や協働学習をスムーズに実施できるようになった。また、学校に来れない児童に対しても、ハイブリット型の授業をすぐに実施できる体制づくりもでき、できるだけ同水準の学習環境を提供することができた。長期休業中も学びを切らさないなど、「いつでも、どこでも、だれとでも」と、これまでのICT活用にとどまらず、一歩進んだ実践を積むことができた。</p> <p>〈課題〉</p> <p>○情報活用能力チェックリストの結果から、「情報活用」の項目の「うまくいかないときに改善するための問題点、解決方法を見つける」の項目においては肯定的な回答がどの学年も低く、「問題発見解決能力」においても課題が残った。</p> <p>○協働的な学習の際に個で作ったデータ活用の効果がうまく発揮されなかつた場面があった。児童が作った資料を共有した際に、比較しやすくするための教師側の工夫が必要であるなど、クラウド上にあるデータの効果的な活用法を今後研究していく。</p> <p>○主体的・対話的な学習を目指す中で、児童自身が「チェックリスト」を持ち自己評価したり、これまでつけた力を発揮しながら学習計画を考え、より良い学習方略を考えたりするなど、児童が活動を調整し、進める機会を取りいれ「自己調整力」の育成を図っていく。</p> <p>《代表校園長の総評》</p> <p>本校では、個別最適な学び」を「協働的な学び」につなげ、教育DXの推進の実現を目指し、「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善に取り組んできました。年間を通して教科横断的に情報活用能力の育成に取り組み、遠隔交流や遠隔合同授業を通して、様々な考え方や実態に触れることで、大阪市教育振興基本計画にもある「多様な児童の可能性を引き出す」ような授業実践を進めることができ、深い学びにつながりました。本年度も園田学園女子大学の堀田博史教授にご指導いただき、取り組みの視点や目指す方向性をご教示いただき、教員の授業力の向上も図ることができました。</p> <p>日々の学習で一人一台学習用タブレット端末を活用することで、どの学年の児童も情報活用能力のスキルアップがきました。今後もさらなるスキルアップを目指して、研究を継続していきます。</p>
------------	---